

黒田梁太郎寄贈図書について

教養部助教授

松 田

清

昭和62年5月から6月にかけて、江馬本、新宮本、高橋本、山脇本等、本学附属図書館所蔵貴重蘭書の書誌調査を行ったことがある。その際、新宮本の中にまぎれ込んでいたフランソワ・ハルマ編『蘭仏辞典』第二版を偶然手に取ることができた。この辞典の第二版は幕末蘭学の発展に大きく貢献した蘭和辞典「ドゥーフ・ハルマ」の底本となったことで知られる。標題紙には「黒田梁太郎寄贈本」（下線部墨書）の印、口絵の右下には「澹寧斎珍藏」の朱印が見られた。黒田梁太郎の名は筆者にとってこれが初めてであった。

同じ第二版でも、香川大学神原文庫の鹿田文平旧蔵本¹⁾、静岡県立図書館葵文庫の檜林重兵衛旧蔵本が蘭学者や通詞の刻苦をしのばせるのに対し、これは羊皮装の美本で、あまり使用された形跡がない。文字どおり珍藏されていたのであろう。小野則秋の『日本の蔵書印』によれば、頼山陽の外祖父で、大阪の儒者であった飯岡義斎（1717-1789）に「澹寧斎図書記」の印がある。およそ蘭学史に名前を出てこない義斎が、どのようにしてハルマ『蘭仏辞典』を入手したか、その経緯を是非知りたいものである。

寄贈者の黒田梁太郎については、『適塾門下生調査資料第Ⅰ集』²⁾（適塾記念会、昭和43）により、『ロビンソン・クルーソー漂流記』の本邦初訳として名高い「漂荒紀事」の訳者で、膳所藩の洋学者黒田殉廬（1827-92）の子であることを知った。受け入れ年月日が昭和2年5月16日とあるところから、さっそく図書原簿でこの日付の箇所を調べると、貴重書のハルマ『蘭仏辞典』をふくめて22点の洋書がまとめて寄贈されていることが分かった。いずれも殉廬の旧蔵書と思われたが、現物に当たる余裕はなく、著者別カードでそれぞ

れの請求番号を調べておくに留めた。貴重蘭書の調査を優先させたのだった。

同年暮れ、黒田殉廬の研究家平田守衛氏より、殉廬生誕160年を記念して自費出版されたご著書『黒田殉廬の業績と漂荒紀事』の寄贈を受けた。拝読したところ、「漂荒紀事」の原書を「ドイツ人カンペの簡約版、そのオランダ訳」とされていた。そこでオランダより当該書を取り寄せて検討したが、残念ながら原書とは認められなかった。昨年4月より1年間、「ドゥーフ・ハルマ」成立史研究のためオランダに滞在できたので、余暇を利用して原書探しを行った。種々のオランダ語訳を検討した結果、殉廬はオランダ語版簡約本を翻訳したのではなく、18世紀にアムステルダムで出版された全訳オランダ語版（初版1720-22、第二版1721-22、第三版1735-36、第四版1752、いずれも三巻三冊で本文同一）の第一巻を自分自身で漢文調に簡約したことが判明した³⁾。

現在、自筆草稿である「魯敏孫漂荒紀事」〔貴重書4-53-ロ-1〕とオランダ語原文とを対比研究する作業を進めながら、並行して「漂荒紀事」

（嘉永三年頃成立）以前に殉廬が訳した、「博物地理編」「博物分析編」「泰西楊世夫伝」（いずれも「漂荒紀事」中に言及あり）「初学窮理抄」の行方を探索している。殉廬の西洋理解とオランダ語力の発展を跡づけたいからである。しかし、黒田梁太郎寄贈図書の内容が不明であるため、これら訳稿の発見は困難を極めている。大正15年6月19日、国語学者亀田次郎（当時大谷大学）は京大文学部の新村出博士、滋賀県史編纂主任牧野信之助とともに黒田梁太郎宅で、殉廬関係資料を調査し、『芸文』17巻9・10号（大正15年10月）に「黒田殉廬の業績及其著書」を発表した。吉野作

造の「海外新話と漂荒紀事」(書物往来、大正15年4月号)に、「最近大阪の荒木幸太郎君は、自ら膳所に黒田家の遺族をたづね、更に麴廬先生の面目を明らかにすべき多くの新材料を得たと聞いて居る」とある。これによれば荒木幸太郎は亀田次郎より一足早く黒田家を調査しているが、その研究成果は寡聞にして知らない。

亀田次郎は報告の中で「嗣子梁太郎氏は此の上の散逸を恐れ、現存の書籍全部を纏めて、京大図書館へ寄贈される事にせられた。誠に結構な事である。」と述べている。この報告(大正15年9月24日稿)によれば、当時黒田家にはつぎの著述および関係資料が存在した。ただし上記ハルマ『蘭仏辞典』など22点の洋書については、写本の Volks-Naturkunde (ママ) をのぞいて言及がない。

(1)由緒書[麴廬自記]、(2)初学窮理抄、(3)文久二年蕃書調書出仕関係書類、(4)利麴薛陀三喜多引^{リケウエダ} [全29冊の内9冊欠]、(5)榜葛刺文典^{ベンガル} [全9冊の内1冊欠]、(6)東本願寺訳文局退職願、(7)願書[滋賀県令籠手田安定あて印度学興立につき]、(8)漂荒紀事、(9)天象新説、(10)地学大旨、(11)西洋星象名義解、(12)氷海航記、(13)新暦明解、(14)線形図解、(15)万国商売往来、(16)西洋料理新書、(17)魯敏孫漂航記事、(18)梵字書、(19)梵英文典、(20)梵天聖語アリアン系、(21)平等時常用比較表[版木とも]、(22)達通館配合西洋暦[版木とも]、(23)改正商売往来、(24)佛語字彙原書書写[Eitel 梵語字書の訳本]、(25)著述目録、(26)蔵書目[安政三年丙辰八月十日現在]、(27)課業日乗[安政元年より明治二十五年の没年までの日記]

このうち、(8)と(17)および(5)と(19)はそれぞれ同書異名と考えられるが、これまでに附属図書館で現存が確認されたものを、請求番号、登録年月日とともに挙げよう。

(4) 利麴薛陀三喜多引 [1-27 り 1]

昭和2年8月1日

(5) 榜葛刺文典 [4-82 ひ 1]

昭和2年8月1日

(17) 魯敏孫漂荒記事 [4-53-ロ-1]

(タイトルは第二冊の題簽による)

昭和42年9月25日

(25) 著述目録(未整理本)

(4)と(5)は上記ハルマ『蘭仏辞典』と同じように「黒田梁太郎寄贈本」の印記を持つが、(17)はこの印記を持たず、寄贈本扱いされていない。(25)は「永順寺印」の朱印がある「利麴薛陀三喜多引」(46冊存、未整理本)のなかにまぎれ込んでいたものである。後者の46冊本は亀田報告に言及のないもので、寄贈本の中に含まれていたものと思われる。これについては(4)とあわせて、現在、大谷大学図書館の渡辺顕信氏が「大谷大学所蔵本との比較検討を進めておられる⁴⁾。なお、(24)の原書は、Eitel, E. J., Hand-book for the student of Chinese Buddhism. London, Trübner, 1870. であろう。

平田守衛氏のご著書がきっかけとなり、黒田梁太郎の孫に当たられる奥村秀一氏宅に、(26)「蔵書目」、(15)『万国商売往来』(明治六年刊)、さらに亀田報告では未確認の『政体新論』(明治七年刊)が、また同じく水口清隆氏宅に、(27)「課業日乗」(「訳業日乗」が正しい)がそれぞれ伝存することが分かった。筆者が去る6月13日奥村秀一氏宅を訪ねた際、文久二年(1861)オランダに留学した西周助がライデンに到着後間もなく、また津田真一郎がインド洋上から洋書調所の同僚である黒田行次郎(麴廬)に書き送った書簡各一通が新たに見つかった。これは亀田報告に言及がない。その他の麴廬関係資料については、(3)の一部をのぞいて行方が分からない。実際に寄贈された図書資料はどれだけあったのだろうか。

筆者が特に出現を望んでいるのは、亀田報告に題言が引用されている「初学窮理抄」である。題言によれば、弘化二年八月猛暑のため適塾が夏休みとなって膳所に帰省中に、「藩医山元氏所蔵ノナチュルキユンデ」を借りて読み、翻訳したという。この原書は、亀田報告に「西暦千七百六十八年(我明和六年)出版英国龍動欲預軒特烈機名^{ヨハンヘンデレツキ}ウキンケビ(ママ)ル^{ヨハンリユロフス}」とあるところから判断して、Winkler (Johan Hendrik), Beginselen der natuurkunde. Naar den tweeden verbeterden Hoogduischen druk vertaald. Amster-

dam, J. Loveringh, 1768. xx, 797p. 8°. と思われる。平田氏は「初学窮理抄」の原書を Volks-Naturkunde (ママ) とされている。亀田報告に「初学窮理抄 Volks-Naturkunde 写」とあるのを、そのまま踏襲されたようだ。藩医山元氏とは佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』の文政七年(1824)に、『瘍医必要』の撰者として名の見える山元周輔であろう。周輔は長崎に遊び、通詞吉雄権之助の教えを受けた。吉雄権之助は「ドゥーフ・ハルマ」の成立にもっとも貢献した優秀な通詞である。『国書総目録』によれば、『瘍医必要』の写本は静嘉堂文庫と九州大学にあり、原著者は「採馬私私古焉丘」、山元道誠とある。原書は18世紀オランダの医者 Thomas Schwencke (1694-1767) の Schets der Heelmiddelen en hare uitwerking op het lighaam. 's Hage, Rotterdam, 1753. と思われる。山元道誠については、京都市立西京商業高校平野文庫の写本「究理大成空気論」に「喁蘭 究理学者 ヘンヤミンマルチン著／皇国 江州膳所医員 山元周輔道成訳」とあるところから、同一人物と思われる。「究理大成空気論」は Benjamin Martin, Filosoophische onderwyzer of algemeene schets der hedendaagsche ondervindelyke natuur-kunde. (第二版1744、第三版1766、いずれも Amsterdam 刊) の第3部第1章の翻訳(ただし未完)である。このような訳業のある藩医山元周輔の存在は蘭学生行次郎の勉学意欲を掻き立てたにちがいない。

麴廬の父黒田扶善(または善、号梁洲)若い頃蘭学に志し、文政五年(1822)に蘭法医小森桃塙に入門した⁵⁾が、父兄の反対にあい、後に藩儒となった人物で、蘭学への理解も深かった。麴廬は天保十四年(1843)、十七歳で適塾に入門したが、これは息子に青春の志を継がせようとした父の命令によるものであった。奥村秀一氏所蔵の「梁洲文稿」(写本1冊)には、梁洲が愛児の翻訳に寄せた「訳夷史楊世夫伝序」(嘉永紀元十月)と「博物新志序」(己酉六月)が含まれている。己酉は嘉永二年(1849)に当たる。後者には「家児舞勺にして能く^{ふしやく}駄舌を操る、蜜籍^{げきせつ}を読む毎に、輒ち奇異を抄りて、竟に此冊を成す」(原漢文)とある。舞勺の年は十三才を意味する。山元周輔に

ついて習わせたのだろうか、大変な熱の入れようである。黒田梁太郎寄贈洋書のなかに、「黒田善印」という蔵書印を持つ蘭書の筆写本(後掲書目 No12)が見られることから、梁洲自身オランダ語が出来たかも知れない。前者の序では「楊世夫伝」を「乳臭の筆、大方に示すに足らず」としながらも、梁洲は子の訳業を弁護し、「方今一種の読書人霊台狭隘なり、我が尚する所に非ざるの書、一切これを斥け、罵りて夷と為し妖と為す、(中略)夷の善行或ひは以て吾が頑情を起こすべし、其の技工或ひは以て吾が遺闕を補ふべし、然らば則ち一切これを斥くるは、豈君子の学ならんや」(原漢文)と当時の蘭学弾圧の流れに抗議している。「舞勺」「乳臭の筆」という表現から、「初学窮理抄」は麴廬の処女作ではなく、それ以前、遅くとも適塾入門以前に、「楊世夫伝」と「博物新志」が出来上がっていたことが分かる。

『国書総目録』にある「摘訳兩種」(黒田善行訳、写本一冊、宮内庁書陵部所蔵)は調査の結果「ニーエケウル」「博物新志」を含み、前者は Nieuwe keur van nuttige en aangename mengelingen, jaarg. 1828-41. Amsterdam, J. C. van Kesteren. という隔月刊の雑誌であること、善行は麴廬の別名であることが判明した。萩藩医久坂玄機(玄瑞の兄)は適塾時代、嘉永元年正月に大阪滞在中の通詞からこの原書を購入し、正月十七日付の両親あての手紙で、入手の喜びをつぎのように伝えている。「『ニューエケウル』と申書九冊外に三本合して拾貳冊、代金拾五両余に相成候、『ニューエケウル』は西洋諸邦之英主豪将之伝、所々之合戦及諸国之地理及日本之地理物語等も詳に相見候、始め左程之物とも不考候所奇々妙々、頃日に至り而誠に愉快至極、仰天仕候、此書昨年新渡に而、六十州中別に無之、当時無双之好書と相誇申候」と⁶⁾。「九冊」とあるのは Brinkman's catalogus van boeken 1833-1849. に1833-1841刊とあるように、この9年分が発行年別に製本されていたためであろう。「当時無多六好書」の原題は「^{新選}趣味と実益」とでも訳せよう。その内容はフランスの新聞雑誌の記事を翻訳編集したものである。凡例によれば、「ニーエケウル」は「漂荒紀事」完

成後の翻訳で、麴廬が江戸遊学中の嘉永五年春に成ったものである。「博物新志」の原書は不明であるが、「博物地理篇」「博物分析篇」と密接な関連があると思われる。

百点を越える麴廬の著訳のうち、生前出版のものは23点到過ぎず、その他はほとんどが散逸し、現存が確認されていない。なかでも「著述目録」に「畢氏経済新書 二百枚」とあるものは、ライデン大学で西周と津田真一郎を指導したS. フィ

ッセリングの経済学書の翻訳と思われ、伝存を祈るばかりである。この訳稿まで探索する余裕がなく、当面は「初学窮理抄」から「漂荒紀事」に至る翻訳の実態解明を更に進めたく思っている。

最後に、「黒田梁太郎寄贈本」の印がある洋書（写本を含む）について、これまで報告がないようなので、簡単な書誌を掲げておこう。〈 〉は印記、[] は請求番号を示す。

黒田梁太郎寄贈洋書目録

1. Quetelet, A. 17.4×11.3cm. [VII-2-Q-2]
Sterrenkunde. Naar het Fransch van A. Quetelet. Middelburg, De Gebroeders Abrahams. 1854. IV, 130, (4)pp.
〈長崎東衛官許〉、「妙福寺」と墨書した附箋挿入される。
2. Nieuw Nederlandsch magazijn, ter verspreiding van algemeene en nuttige kundigheden. 1851. Opgehelderd door 230 fraaije Afbeeldingen. Amsterdam, Gebroeders Diederichs. (iv), 416 pp.
29.5×20cm. [X-6-N1-別]
各ページ二段組。附箋挿入箇所：p.36, p.129, p.193, p.200, p.224, p.399.
3. Martin, H. 17.4×12cm. [III-5-M-7]
Beredeneerd Nederduitsch Woordenboek. Amsterdam, H. Moolenijzer. XX, 904, 44pp.
〈長崎東衛官許〉。
4. VOLKS-NATUURKUNDE || Of || Onderwijs in De Natuurkun- || de voor mingeoefenden; || tot wering van || Wanbegrippen, Vooroordeel || en Bijgeloof. || uitgegeven door de || Maatschappij: || Tot nut van 't Algemeen || (vignet) || te Amsterdam, bij || corns. de Vries, hend ^k. van Munster en Zoon || en || johannes van der heij. || 1811.
写本。和紙の横罫紙（20界）に墨書。袋綴じ。3冊。朱筆訂正あり。
第一冊：143丁（内122丁は丁付あり）。22.4×16cm。
第二冊：89丁。赤通し多し。22.6×16.1cm。
第三冊：51丁。 23.3×16.4cm. [VII-0-V-2]
5. Leesboek voor de scholen van het Nederlandsche leger, bevattende korte verhalen uit de krijgsgeschiedenis, bijzonder die van het vaderland. 's Gravenhage, Gebroeders Belifante. 1845. 69pp.